

私がなぜ現在の科目を選んだか

「組織発生学」

信州大学医学部組織発生学教室

岳 鳳 鳴

医師は中国では「白衣の天使」と呼ばれています。つまり、医師は純粹、親切で、患者を救います。医師は人々を癒し、救うために神様から世界に送られた天使たちに例えられています。私は子供の頃からずっと医者への職業に感心してきました。高校卒業後、希望通りに医学部に入学しました。大学の最初の年に、組織発生学の授業は私の目に魔法の窓を開きました。顕微鏡下では、210種類を超えるさまざまな形状とサイズの細胞がさまざまな機能的活動を行い、体内で互いに調整、協力して、全体的な生命活動を維持しています。細胞や組織は人体のほぼすべての構成要素であるため、組織学を理解することは、細胞や臓器の生理機能、および臓器系の発達を理解するのに役立ちます。すべてのヒトの疾患は、正常な構造の障害であるため、組織学は病理学の基礎と見なされます。診断、予後、効果的な治療、治療の有効性に関する重要な洞察を提供し

ます。

組織学のミクロな見方は退屈なようで、一部の医学生はより実践的な臨床分野への移行を熱望しています。しかし、組織学を習わなければ、医学の他の知識は無意味になります。そのため、大学卒業後、組織学の研究を続けることを決意し、幸いにも信州大学医学部組織発生学講座で留学する機会を得ました。大学院生期間に、当時の主任教授の佐々木克典先生は、私に多くの再生医療に関する研究提案を与え、良い研究者になる方法を示しました。また、アメリカの有名な大学に行き、科学研究の経験とビジョンを豊かにするように勧めました。アメリカのカリフォルニア大学バークレー校でのポストドク研究が終了後、アメリカの有名な生物系企業の誘いを断念して信州大学に戻り、再生医療研究を続けました。現在、研究者として、組織発生学の知識を使用して組織および器官の発生過程と微小環境をインビトロでシミュレートし、幹細胞の特定の細胞への分化誘導を行い、再生医療実用化に貢献する研究を楽しみにしています。同時に、大学教員として、教室の福島教授、城倉准教授のサポートをいただき、教えることを通して、私の組織学への情熱を学生へ伝えるよう努めています。

(信大大学院平18年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「循環器内科」

信州大学医学部内科学第五教室

正 印 航

私がH22年に新潟大学を卒業した当時、まだ志望科も、拠点とする地域すらも決めあぐねていました。研修先を選んだ新潟県の上越総合病院は、科により金沢、富山、信州と様々な大学の関連病院であり、立地的にも地元の金沢市に近く、見学に行った時の雰囲気も良く、と思えば医師としてモラトリアム期間を送るのに一番しっくり来たのでしょうか。まず私と循環器内科の出会いと言えば、当時研修責任者であった循環器内科医の恩師の存在でした。診療に教育に、と非常に熱い先生であり、「先生さあ！」と度々怒られつつも熱心に面倒を見ていただいたのが循環器に興味を持つきっかけになったかと思います。医師になりたての私にとって、急変時に颯爽と駆けつけて最前線で指揮を取る循環器内科の先生方の姿は眩しくもあり、当時よ

り不器用ながらに手技は好きでしたので、漠然と志望科候補の一つに入ることになりました。循環器内科研修では、急性冠症候群や心不全等で搬送されてくる患者さんの対応に右往左往しながらも、治療によりみるみる良くなるという医療者として貴重な経験を度々しました(その分急変もありましたが)。当時は、救急疾患を循環器で担当することも多く、あれこれ頭を悩ませて治療内容を調整しながら、すぐ返ってくる反応に一喜一憂するのも好きでしたし、血行動態や電気生理の明瞭な考え方が私に合っていたというのがあります。一言で言えば「最も性に合っていた」という事に尽きると思います。急患が多く、自分に務まるかという心配も多分にありましたが、生涯の仕事とするなら何よりそこが大切と思い、循環器内科の門戸を叩くこととしました。長野県に全く縁のなかった私が、偶々出身大学のある新潟県で初期研修を行い、偶々上越総合病院で唯一信州大学の関連病院であった循環器内科を選択し、現在長野県で働いている。恩師は、よく患者さんにも「縁」という言葉を使っていましたが、今の自分があるのもつくづく縁だなあ、と思います。

(新潟大平22年卒)